

実践女子大学他蔵

源氏物語古筆切目録稿（四）

横井 孝

要旨

実践女子大学は長らく『源氏物語』の古筆切の収集に努力してきた。稿者が『源氏物語 古筆の世界』を出版した後もかなりの古筆切が集まった。二冊目の本を出版する準備のために、個人所蔵のものを含めて、とくに一連の断簡の存在するものの中から十一點を選んで、本稿に紹介する。

- | | | | | | |
|---|------------------|---|------------------|----|----------------|
| 1 | 伝後伏見天皇筆「鈴虫の巻」断簡 | 4 | 伝後光厳天皇筆「若紫の巻」断簡② | 8 | 伝冷泉為相筆「竹河の巻」断簡 |
| 2 | 伝後伏見天皇筆梗概本 | 5 | 伝藤原為家筆「真木柱の巻」断簡 | 9 | 伝冷泉為相筆「橋姫の巻」断簡 |
| | 「御法の巻」断簡 | 6 | 伝藤原為家筆「若菜の上巻」断簡 | 10 | 伝足利義輝筆「若紫の巻」断簡 |
| 3 | 伝後光厳天皇筆「若紫の巻」断簡① | 7 | 伝冷泉為相筆「夕顔の巻」断簡 | 11 | 伝足利義輝筆「竹河の巻」断簡 |

Draft Catalog of “*Tale of Genji (Genji Monogatari)*” Fragments from Old Manuscripts in the Collections of Jissen Women’s University and Private Collections (IV)

Takashi Yokoi

Jissen Women’s University has long been dedicated to collecting ancient manuscripts of “*The Tale of Genji (Genji monogatari)*.” Since the publication of “*The Tale of Genji : The World of Ancient Fragments*,” a substantial number of ancient Fragments have been acquired. In preparation for a second publication, eleven pieces, encompassing those from private collections, have been selected from among those containing a series of fragments and are introduced in this research.

一 つかのまの再開の弁

『源氏物語』の古筆切集成の単行本を出したい、という願望がまず前提にあつて、その準備稿という心づもりで始めた同題稿であつたから、『源氏物語 古筆の世界』が無事に出版された以上、その役割はひとまず完結したはずであつた。しかし、『源氏物語』が実践女子大学にとって格別なものという認識が関係者の間にあり、そのせいもあつてか、さらに古筆切が集まってくる。となると「古筆切集成の続篇を出したい」という欲望に駆られてしまうのも人間の性ではないのだろうか。

しかし、「第一巻」（あえて『古筆の世界』をこう言わせていただこう）のあとがきにも書いたように、目標を定めて始動したのが二〇一八年、どうにかこうにか上梓したのが二〇二三年の歳晩近くだった。そもそも文芸資料研究所を中心に収集を始めたのが、さらに溯る二〇〇八年ころ。性癪情な稿者が漫然の日々を過ごしていたにしても、呆れたことに一五年が経過していた。これから「第二巻」を目指すにしても、準備稿を用意するにしても、もはや齡七句を超えたどころか、四捨五入すれば八句になる人間が、そう遠い将来を期する話はできそうもない。したがって、つかのまの再開、かりそめの再開になるのが本稿である。

二 『源氏物語 古筆の世界』の弁明

さてその『源氏物語 古筆の世界』。

(A) どのような書物でも、世に出れば出たで、かならず不満や後悔の念が生ずるはずだと稿者などと思うのである。

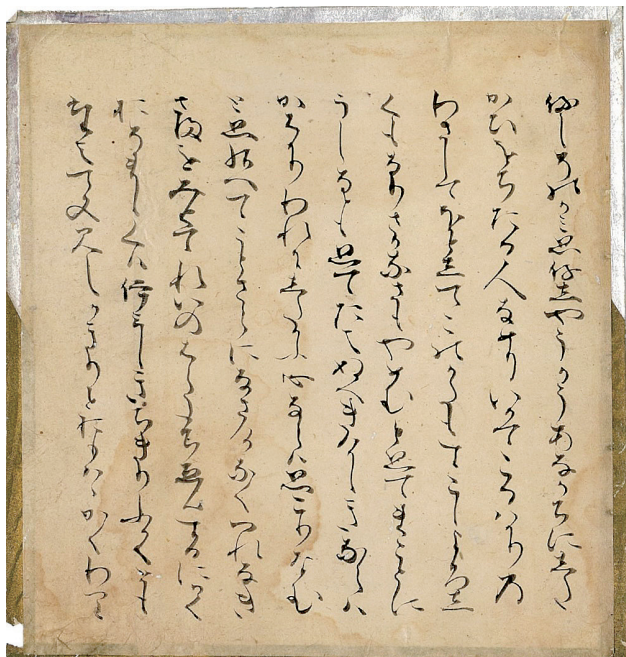
「ああすればよかった」「こうすればよかった」という悔恨は、どの分野にもある話であろう。特に当該書は、まず第一に、重大な失策を犯してしまったことを告白しておかねばならない。

二〇二三年十一月、出版社から完成本が手許に届いて間もなく、執筆者のお一人、高田信敬（敬称略）より、「^[433]と^[483]」の画像が重複している」という話が飛び込んで来たのである。慌てて確認してみると、たしかに両者まったく同一の断簡を掲載、別々に執筆者も変えて解説を付している。一方は本篇の第五部、他方は補遺。本書の編集も終盤で、補遺に入れるか本篇に入れるか迷ったものの一葉だった。校正も第三校を出版社に返す直前、念のためと全体をざっと見直した際に、「南園文庫蔵」の断簡の解説を文庫主でない方が書いているのに微かな違和感をおぼえたにもかかわらず、ふだんであれば附箋をつけておくものの、そのまま出版社に送り返してしまった。現在でも悔悟とともに記憶している。南園文庫提供の断簡の解説は、例外なくすべて文庫主の執筆が前提だったはずなのである。編者自身が文庫主にお願ひしたはずなのに。「違和感」というのは、決して「気のせい」ではない、経験値にもとづく何かであることがほとんどであり、違和を抱くことが正しかったのだ。

ここで改めて本書を手取る方々に謹んで申し上げる。

『源氏物語 古筆の世界』^[433]を欠番とする。

——と。



(B) なお、欠番に纏わる話題をもうひとつ。

本書の校了後、カパージャケットのデザインについて編集子とやりとりをしていた際、一葉の古筆切【図1】と遭遇した。

縦一七・〇センチ、横一六・〇センチほどで、神田道伴の極めに「慶融法眼」とある。

内容は帚木の巻、左馬頭の経験談のいわゆる指食いの女の物語の冒頭箇所であった。これは、稿者のような素人目にも『古筆の世界』の²³⁹のツレではないかと思われた。「種類よりもツレ」というコンセプトで始めた同書であるから、是非とも掲載したいとは思いはしたが、残すはジャケットのデザイン決定のみという段階であったから断念せざるをえない。そこで非常手段として、ジャケットの中にその原稿を押し込んだ【図2】。この記事の存在に気づかれた方がおられるだろうか。

これに「493」と通し番号を付したかったのだが、さすがに出版社から——ジャケットは図書館等に収められる際に剥がされてしまうことがあるので残らない可能性はある——と諫められ、泣く泣く通し番号は断念したのだった。いまここに再録しておく。「第二巻」があるのなら、南園文庫蔵切と並べて掲載したいものである。

慶融 六半切(帚木)

個人蔵。本書校正中に新出の断簡。



斐楮混漉ではあるが、高精細デジタル顕微鏡での観察によれば、斐紙の繊維の混入はごく少なめ。縦一七・〇センチ、横一六・〇センチ。字高一二センチほど。南園文庫蔵の「239」のツレであることは明らか。

内容は帚木の巻、「239」の後文、左馬頭の経験談のいわゆる指食いの女の物語の冒頭箇所である。定家本の本文と同じ。神田道伴の極めがある。(横井)

侍しそのかみ思侍しやうかうあなかちにした

かひをちたる人なめりいかてこるはかりの

わさしてをとしてこのかたもすこしよろし

くもなりさかなさもやめむと思てまことに

うしなとも思てたえぬへきけしきならば

かはかりわれにしたかふ心ならば思こりなむ

と思給へてことさらになさけなくつれなき

さまをみせてれいのはらたちゑんするにかく

おそましくはいみしきちきりふかくとも

たえて又見しかきりとおもは、かくわり (『源氏物語大成』四九頁⑦) ⑬

(C) 「伝寂蓮筆六半切」についての補遺。

文芸資料研究所が古書肆から『源氏物語』の古筆切をまとめて購入した際、[230] [231] [232]と同筆の切を順不同に入手するということがあった。『典籍と古筆切―鶴見大学蔵貴重書展解説図録』(鶴見大学、一九九四年一〇月)にあ

り、田中登『古筆切の国文学的研究』（風間書房、一九九七年九月刊）の第六章第二節「源氏物語の古筆切」の冒頭にあげられる断簡のツレとあれば、当然意識の枠から外すわけにはゆかない。しかもその後間もなく、別の古書肆から画像^{〔234〕}「^{〔235〕}」のもとになる、表裏完全体の一葉を文芸資料研究所では入手している。化粧裁ちしていない、ほぼ原型のままの二丁分（原装は列帖装であるので一紙の半分）である。

右にも言及したように『古筆の世界』は、たとえ既知のものであっても新出の断簡と一堂に会することでの存在意義が高まるはずであり、そうでなくては古筆集成の意味がない、という意識で製作された本である。「伝藤原為家筆大四半河内本切」私のいうところの「為家本」とともにこの「伝寂蓮筆六半切」を該書巻末の拙文『源氏物語』本文資料としての古筆切にとりあげ、管見の及ぶ範囲での所在を網羅した一覽を掲げた。五二六頁からの「伝寂蓮筆六半切河内本『源氏物語』若紫の巻本文残存一覽」である。

『古筆の世界』が上梓される前後、それを押し上げるための企画で、版元から『武蔵野文学』第七〇集（二〇二三年一月）に「源氏物語と古筆切」という特集が編まれた。執筆者のお一人・久保木秀夫が「伝寂蓮筆『源氏物語』「若紫」断簡とその残欠本」を寄せた。まさに当該の断簡についての新出のツレであり、隙間を埋める「残欠本」の紹介でもあった。ここに紹介される新出断簡について、事前事後に久保木から教示を得、なんとこれも『古筆の世界』の補遺に間に合ってしまったのである。

しかし、この久保木稿にもきちんと言及され、かつては稿者も披見していた国文学研究資料館編『古筆への誘い』（三弥井書店、二〇〇五年三月）所収の「43 源氏物語 若紫卷」（同書九八～九九頁）がまさしく伝寂蓮筆六半切のツレである。稿者は、右記の一覽にこれを漏らしてしまっていた。本稿をなす直前、所蔵者の大垣博（敬称略）から直接ご注意をいただいた。慌てて同書を開いてみたら、二丁寧にも稿者みずから当該頁に附箋をつけていたことすら忘れていた。

情けない。不明をお詫びする。

『古筆への誘い』所収切は、一覧の14と15の間に位置し、

14—2	一八二頁1行目「こひきこえ」→一八二頁6行目「とおほして」	個人蔵
------	-------------------------------	-----

の一項が挿入されることになる。この断簡が入ることによって、『源氏物語大成』の一七八頁4行目から一八二頁6行目まで相当の本文が読めるようになった（通し番号も修正するのが理想的ではあるが）。ツレ集積の力である。

三 『源氏物語 古筆の世界Ⅱ』 準備稿のなかから

〔1〕 後伏見天皇 四半切（鈴虫）

個人蔵。

縦二五・三センチ、横二六・一センチ。字高、約二二・八センチ。

二代朝倉茂入の極めを付す。ただし、よく知られる梗概本の四半切（『古筆の世界』では〔333〕→〔342〕に収めた）とは大きさはほぼ同じだが、字体がまったく異なる。字粒も小さい。もとより後伏見院の筆跡ではない。同院の宸筆には、身近なところでは本誌『年報』第三七号（二〇二二年三月）所収、高倉永佳「高倉家蔵 後伏見院宸筆装束抄」に掲載されている。仮名文献で比較しやすいので参照されたい。

全体にかなり日焼けしており、左の写真は読みやすくなるよう若干画像を明るく調整した。

内容は鈴虫の巻。中秋の夜、内裏の月の宴が中止になり、物寂しい思いをする人々が源氏の許に参集するという場面。この後、冷泉院からの招きがあり、螢の宮・夕霧たちを引き連れて御所に向かうのである。1行目「今夜」は、『源氏物語大成』に徴するに西下経「蔵本のみ同じく、他は「こよひ」、という微細な差異があるが、本文はほぼ定家本のそれである。ツレは管見に入っていない。ご教示を乞う。

料紙は楮紙。7行目「あらたなる」に朱の合点を付す。『河海抄』は白詩「三五夜中新月色」を引き、「あらたなる月の色などあるも、旁此句の心ときこえたるにや。伊行尺井水原抄「長谷雄卿十二廻中句を書載たる、参差する也」とあるが、『花鳥余情』『弄花抄』『細流抄』等には記載なく、『一葉抄』のみ言及する。

ていれたてまつりたまふ内のおまへに今夜は月

のゑんあるへかりつるをとまりてさうくしかりつる

にこの院に人くまいたりたまふとき、つたへてこれ

かれかむたちめなともまいたりたまへりむしのね

のさためをしたまふ御ことゝものこゑくかき

あはせておもしろきほとに月見るよひのいつとても

物あはれならぬおりはなき中にこよひのあらたなる

月の色にはけに猶わかよのほかまでこそよろ

（『源氏物語大成』一二九八頁⑥～⑪）

[illegible]

〔2〕 後伏見天皇 四半切（梗概本・御法）

実践女子大学文芸資料研究所蔵古筆手鑑『源氏物語切集（Ⅱ）』所収。ただし、稿者が「実践女子大学文芸資料研究所蔵『源氏物語切集』のこと」（『武蔵野文学』第七〇集、二〇一三年一月）で紹介した古筆手鑑とは同名だが別物。題簽に記載がない。ここでは内容から鑑み、『源氏物語切集Ⅱ』と仮称することにしたい。これについては、いずれ近い将来、一冊目の手鑑ともども詳細な検討がなされるであろうことに期待したい。

縦二五・五センチ、横二六・二センチ。字高約二三・〇センチ。

印形との釣り合いにやや違和感あるが古筆了悦の極めか「後伏見院御かたに（琴山）黒印」とある。こちらが当の梗概本である。断簡本文の箇所は物語本文そのまま引かれていて省略がないのは『古筆の世界』³³³の場合と同様。大きな異同は見られない。3行目「御返」の部分の校異、

御返―断簡

御かへり―大・横・池・肖・三・（大）・〔陽・保〕

御かへし―（御・七・尾・為・鳳・岩）

御かへしこと―（宮・平）

御返事―〔麦〕

御返し―〔阿〕

とあり、返歌「かへし」「かへり」等についての表記は野村精一「異文と異訓——源氏物語の表現空間（三）」（『源氏物語とその影響 研究と資料——古代文学論叢 第六輯』武蔵野書院、一九七八年三月刊）が詳細に取り上げるところだが、

この箇所についての言及はない。

5行目「そこはかとなくそ」の部分、

そこはかとなくそ―断簡・大・横・池・肖・三・(宮)・(陽・保・麦・阿)

そこはかとなくとそ―(御・七・尾・為・平・大・鳳・岩)

とあり、おおむね定家本系の本文と見て齟齬はないと思われる。「返」は「かへし」「かへり」の両方訓みうるところであり、矛盾点ではないであろう。

御かたに三の宮してきこえ給へる

おしからぬこの身なからもかきりとて

たき、つきなむことのかなしき御返こゝろほそ

きすちはのちのきこえもこゝろをくれたるわさにや

そこはかとなくそあめる

たき、こるおもひはけふをはしめにて

この世にねかふのりそはるけき夜もすからたう

ときことにうちあはせたるつゝみの声たえすおも

(『源氏物語大成』一三八三^⑬～一三八四頁^⑤)

後伏見院 ちくこ


わづらひのまゝてまゐりて

わづらひのまゝてまゐりて
そもつゝなむいふわづらひのまゝて
わづらひのまゝてまゐりて
わづらひのまゝてまゐりて

わづらひのまゝてまゐりて
わづらひのまゝてまゐりて
わづらひのまゝてまゐりて
わづらひのまゝてまゐりて

〔3〕 後光厳天皇 六半切(若紫)

実践女子大学文芸資料研究所蔵古筆手鑑『源氏物語切集(Ⅲ)』所収。これは右の後伏見天皇切を収める手鑑とは別物。文芸資料研究所は『源氏物語』のみを集めた古筆手鑑を三部所蔵しており、紛らわしいので所蔵の順番に稿者が勝手に『Ⅱ』『Ⅲ』と称している。収納の桐箱に「高貴名家諸氏御手跡集」と墨書するが、折帖には剥離の痕跡が明瞭に残っている箇所もあり、「御手跡集」の内容を解体した後に、『源氏物語』の断簡のみを集めた手鑑を作成したものかと稿者は推測している。冒頭の「太秦頭昭法橋」の建仁寺切からはじめて後京極良経・越後局・後光厳院・冷泉為秀・阿仏尼・一位局・邦輔親王……と順不同に全一五枚が続く。この手鑑についても、順次検討されることが期待される。

古筆了祐の極に「後光厳院きこうげん（琴山きんざん黒印）」とある。『古筆の世界』「8」のツレであろう。「伝後光厳院筆」というと稿者は『夜の寝覚』の六半切を反射的に想起する。同物語の末尾欠巻部の一部であることを示す散佚資料と合致する断簡に出くわした思い出があるからだ。あの肥瘦のくつきりとした癖字と本断簡の筆跡には似ているところもあるが、他筆と思われる。「後光厳院」は南北朝という時代の書写者の象徴的な名とされていたのであろう。『古筆の世界』には一二枚収めているが、筆跡も七、八種あるようで、なかなかツレと認めることのできる例が少ない。

因みに、かの物語の伝後光厳院筆断簡は、池田和臣の加速器質量分析法による検討で、伝後光厳院筆切が九五%の確率において、暦年代で一三〇五年から一四〇九年までの料紙であることが証されている（『新 古筆資料の年代測定Ⅰ——加速器質量分析法による炭素14年代測定』（中央大学文学部『紀要—言語・文学・文化—』第一一九号、二〇一七年三月）。

当該断簡の寸法は、縦一六・二センチ、横一六・一センチ。

内容は若紫の巻、北山の僧都に直面した際の源氏の心中、藤壺への思い垣間見た紫の君への慕わしさなどが交錯する場面である。断簡1行目「御つみ」の部分の校異は、

御つみ―断簡・榊・池・三

わかつみ―御・大・横・肖・幽・〔麦・阿〕

わか御つみ―明・公・〔河〕

我御つみ―〔陽・中〕

とある程度。他は、3～4行目「おもひなやむへきなめり」、4～5行目「いみしかるへき」、7～8行目「こひしければ」、8行目「ものし給」など、別本などに校異のある箇所だが、いずれも『大成』の底本の範囲を出ない。定家本の本文に即するものと考えてよからう。

きこゑしらせ給御つみのほとおそ

ろしくあちなき事に心をしめ

ていけるかきりこれをおもひなやむ

へきなめりましてのちの世のいみし

かるへきおほしつゝけてかやうなるす

まゐもせまほしうおほえ給ものから

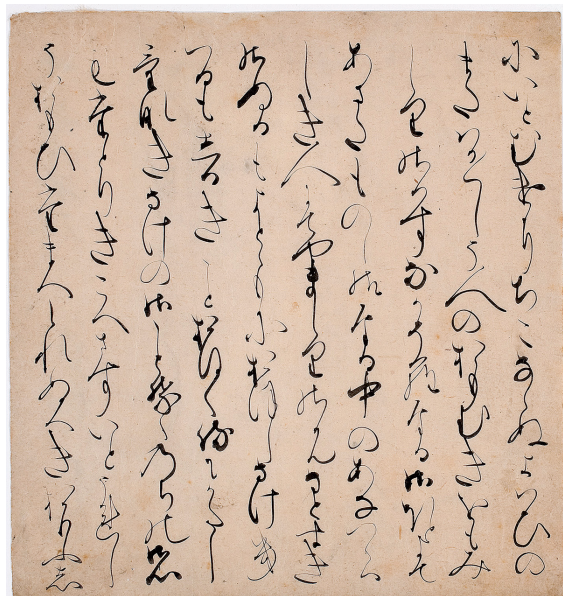
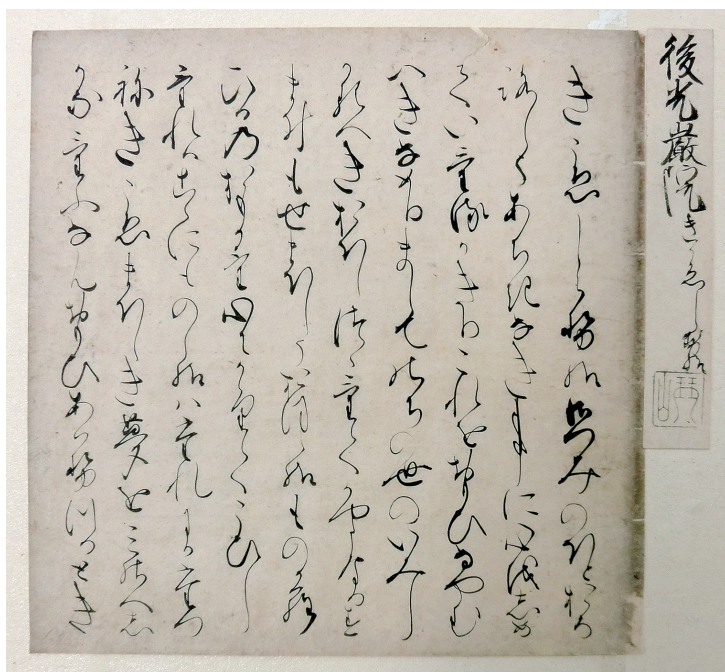
ひるのおもかけ心にかゝりてこひし

ければこゝにものし給はたれにかたつ

ねきこゑまほしき夢をみ給へし

かるけふなんおもひあはせつるとき

〔『源氏物語大成』一六〇頁⑤～⑩〕



参考…後光厳天皇〔『古筆の世界』〔8〕〕

〔4〕 後光厳天皇〔未詳〕 六半切(若紫)

これも実践女子大学文芸資料研究所蔵古筆手鑑『源氏物語切集(Ⅱ)』所収。横長の折帖で、これも西行・顕昭・津守・国久・後伏見院・冷泉為相……と順不同に並ぶうちの七枚目に貼付されている。その扱いを見るに、おそらく『Ⅰ』(『武蔵野文学』第七〇集で紹介した手鑑)『Ⅱ』『Ⅲ』ともに現代の業者の所為ではないかと想像される。

さてこの切、極めが付いていない筆者未詳の一枚だが、本稿直前に紹介した〔3〕のツレであろう。筆跡の相似、寸法もほぼ同じく、まだ高精細デジタル顕微鏡で調査をしていないが、目視では同様の紙質であろうと判断されるところでもある(稿者の「目」ではアテにならないが)。前者1行目「きこゑ」を本断簡の4・5・7行目の「きこゆ」、前者1行目「ほとおそ」を本断簡8行目「ほとにおはす」のあたり等々、比較する材料に事欠かない。

縦一六・〇センチ、横一五・三センチ。

内容は若紫の巻、〔3〕の場面から少し離れた後、源氏が紫の君を慕う気持ちを尼君に伝える場面。断簡5行目「さるやうありてきこゆるなん」、7行目「きこゆ」ほか河内本にはそれぞれ「さるやうこそは」「かくなるときこゆ」という異同のある箇所だが、定家本の枠から外れない。〔3〕と同様である。

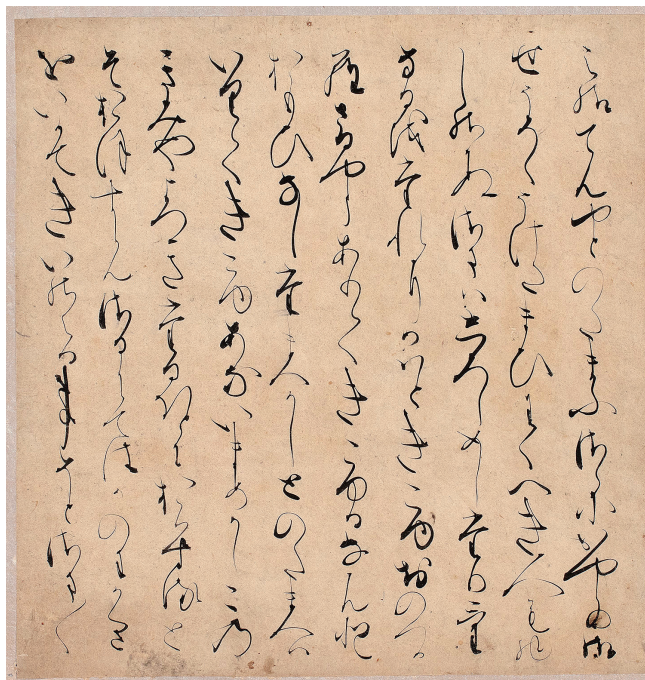
え給てんやとのたまふさらにかやうの御

せうそくうけたまひわくへき人も物

し給ぬさまはしろしめしたりけ

なるをたれにかはときこゆおのつか

らさるやうありてきこゆるなんと
おもひなしたまへかしとのたまへは
いりてきこゆあないまめかしこの
きみやよつきたるほどにおはすると



そおほすらんさるにてはかのわかくさ
をいかてきい給える事そとさまく

〔『源氏物語大成』二六三頁⑨～⑭〕

〔5〕 藤原為家 大四半切(真木柱)

実践女子大学文芸資料研究所蔵。

為家を伝称筆者とする断簡が多いことはよく知られていて(藤井隆・田中登『国文学古筆切入門』和泉書院、一九八五年二月刊ほか)、源氏物語切だけでも相当数にのぼるであろう。『古筆の世界』でも〔79〕〔114〕の大小三六枚を掲載することができた。ただし筆跡は多岐にわたり、右の書所収切だけでも数種の書体を認めうる。鎌倉中期を代表するものとして藤原為家の名が利用されているのである。

その伝為家筆を代表するのが、この一連の大四半切である。鎌倉中期をも代表する優美な書体で、形も超大型の断簡群をあげることができる。原装とおぼしき紅葉賀一帖が発見され、改装されたとはいえ、ほぼ一帖全体が卷子本の形(花宴・藤裏葉・鈴虫・幻ほか)で残された巻があり、断簡もまた集中的に残存する巻(薄雲など)があり、かつては『源氏物語』一揃えであった可能性が高まっている。稿者などは、こうした情報を踏まえて、もはや「伝藤原為家筆本」「為家本」と称してよいのではないか、これと尾州家本をもとに河内本の淵源、延いては鎌倉初期のこの物語の本文情況を考えてよいのではないか、と考えている(『古筆の世界』所収「源氏物語 本文資料としての古筆切」、ならびに科研費報告書『源氏物語から新文献学へ』^{〔テイル〕}二〇二五年三月)。

この「為家本」の真木柱断簡は、今日まで三点(個人蔵〔11〕「かけくしきすちならは」、〔12〕「こゆる事にはあらずや」、〔13〕「実践女子大蔵」ゆるされありてを)の存在が知られていたが、ここにもう一点加えることができたのは喜ばしい。縦三一・八センチ、横一〇・三センチ。

内容は真木柱の巻、鬚黒と結ばれた玉鬘が、男踏歌の後の管絃の遊びの際に、尚侍として出仕すると螢の宮は氣も

そぞろで玉臺の局のあたりをうろつくという場面。断簡1行目「御つほねのわたり」とある部分、細かい箇所ではあるが、

わたり―断簡・（河）・〔保・長〕

あたり―定・〔陽・麦・阿〕

という対立する本文がある。また同様に、2行目「おもひやられければ」について、

おもひやられければ―断簡・（河）

思やられければ―（河）

思やられたまひければ―〔保〕

思やられ給けり―〔長〕

思やられ給へは―定・〔麦・阿〕

思やり給へは―〔陽〕

3行目「ゐたまへりける」

ゐたまへりける―断簡・〔陽・保〕

ゐ給へりける―（河）

ゐ給ける―〔長・麦・阿〕

おはしける―定

4行目「それより」

それより―断簡・御・横・為・池・肖・三・（河）・〔陽・保・麦・阿〕

そなたより―〔長〕

これより―大

同4行目「しふく」にそ

しふく」にそ―断簡・（河）〔保〕

しふく」に―定・〔陽・長・麦・阿〕

など、いずれも漢字・仮名の表記の別を考慮しなければ、河内本の本文という従来の評価を改めるほどの校異は存在しないとみてよからう。

二代朝倉茂入の極めを有し、「中院大納言為家卿ひたまひて（黒印）」とある。朱点があるのも他の「為家本」と同じ。料紙は薄雲の巻などと同質の斐楮漉混。

ひたまひて・しつ心なくこの御つほねのわたり

おもひやられければ・ねんしあまりてきこえ給

へり・大將はつかさの御さうし曹司にそゐたまへりける・

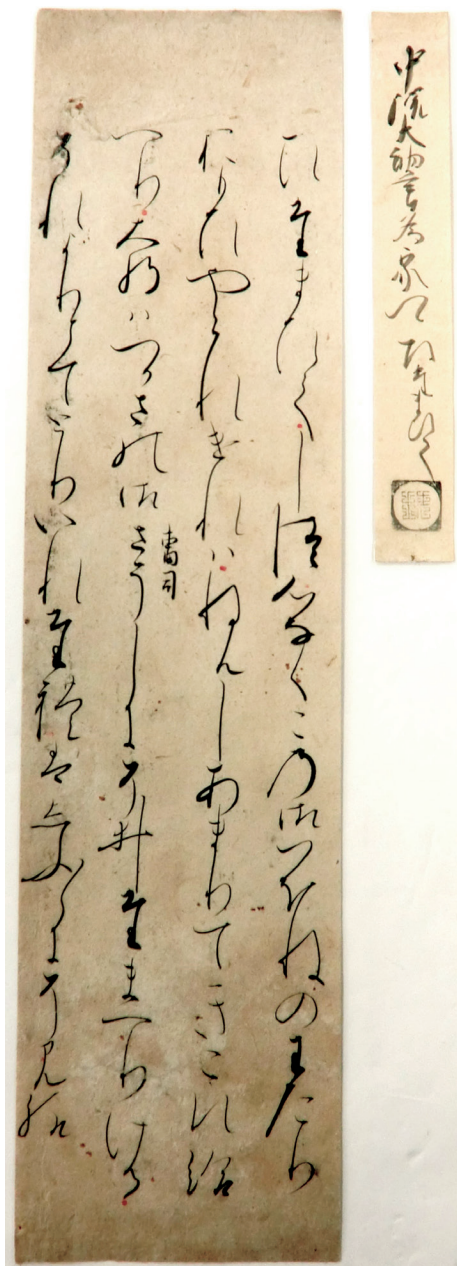
それよりとてとりいれたればしふく」にそ見給
（『源氏物語大成』九五九頁⑥⑧）

〔6〕 藤原為家 六半切(若菜上)

ここで紹介したい為家切は多けれど、伝為家筆断簡の総合的研究するには日暮れて道遠し。手近なところ実践女子大学文芸資料研究所蔵の六半切から一つだけあげよう。

縦一六・四センチ、横一五・二センチ。字高約一四・四センチ。

古筆了任の極があり、「為家卿きまで(「守村」黒印)」とある。ごく細い筆遣いで繊細な書体に見える。残念ながら管見ゆえ、ツレに思い至らない。



内容は若菜上の巻、若菜を献上した尚侍・玉鬘が源氏四十の賀を祝い「若葉さす」の歌を詠む場面。本文に大きな異同のある箇所ではないが、定家本の本文と考えてよからう。

きまて思しらるゝおりも侍ける中納言

のいつしかとまうけたなるをことくしく

思へたてゝまたみせずかし人よりことに

かそへとり給けるけふの子の日こそ猶

うれたけれしはおひを忘れても侍る

へきをときこえ給かむの君もいとよくねひ

まさりものくしきけさへそひて見る

かひあるさまし給えり

わか葉さす野辺のこまつをひきつれて

もとのいはねをいのるけふかなとせめてお

（『源氏物語大成』一〇五四頁④～⑩）

〔7〕 冷泉為相 六半切(夕顔)

実践女子大学文芸資料研究所蔵。未表装の一葉。

藤原為家が鎌倉中期の「顔」だとすれば、その息・冷泉為相は鎌倉後期の「顔」ということになる。母親の阿仏尼(安嘉門院四条)が鎌倉後期の女手の「顔」とされているのと同様である。実にさまざまな書体の切が「為相筆」に宛てがわれている。本断簡もその一例。『古筆の世界』〔154〕と似ているが、考究のゆとりがなく、指摘に留める。

縦一七・三センチ、横二〇・六センチ。楮紙一〇〇%である。

奥西宗円(生没年未詳)の端正な筆致の極があり、「冷泉殿元祖為相卿うにはく(堯倫「黒印」)とある。

内容は夕顔の巻末近く、夕顔を目の前で失った衝撃がようやく癒えたころ、ひさしぶりに空蟬・軒端萩と歌を交わす場面である。本文の校異を見てゆけば、次のようになる。

1行目「(かや)うにはにくからす」

うにはにくからす——断簡・(河)

うにはにくからすは——大・横・榊・池・三

うに、く(朱ミセケチ)からすは——明

うにににくからすは——御

うにににくからすは——幽

うににくからす——肖

うには——〔別(陽・麦・阿)〕

同1行目「けちかくてとは」

けちかくてとは——断簡・(七・宮・尾・鳳・兼・岩)

けちかうてとは——〔陽〕

けちかくとは——定・〔麦・阿〕

けちかくては——(大)

2 3行目「いふかひなくみえたてまつらて」

いふかひなくみえたてまつらて——断簡・(七・鳳・兼・岩)

ゆふかひなくみえたてまつらて——(尾)

夕かひなくみえたてまつらて——(宮)

いふかひなく見え奉らて——〔麦・阿〕

いふかひなからすは見えたてまつりて——大・櫛・横・池・肖・三・幽

いふ。なからすは見え^{かひ}たてまつりて——御

いふ(墨スリケシ、朱傍書「いふ」)かひなからすはみえたてまつりて——明

いふかひなからす見え^らたてまつり〔り〕左ミセケチ、右〔ら〕傍書て——公

ゆふにかいなくはみえたてまつらて——〔陽〕

3行目「思ひけり」

思ひけり——断簡・明

思けり——(七・宮・尾・鳳・兼・岩)・〔麦・阿〕

思けりね——（大）

おもひけり——横

おもふなりけり——御・大・榊・池・肖・三

思なりけり——公

思也けり——幽

4行目「少将」

くら人の少将——断簡・〔陽〕

藏人の少将——（河）

藏人少将——〔麦・阿〕

藏人の少将をなん——明

藏人の少将をなむ——公・幽

くら人の少将をなん——御・大・榊・横・池・肖・三

5行目「あやし」

あやし——断簡

あやし——（大）・〔別〕

あやし——明・幽・（河）

あやしや（「や」ミセケチ「く」傍書）——公

同5行目「思らん」

思らん——断簡

思ふらん——(河)

おもふらんと——定

思ふらんと——明・公・幽・(陽・阿)

思らんと——〔麦〕

6行目「いとをしく又」

いとをしく ^又——断簡

いとをしく又——〔麦〕

いとおしく又——〔阿〕

いとをしくまた——御・大・榊・池・三

いとをしう又——〔陽〕

いとをしうまた——公・幽・横・肖

いとをしうまた ^{又(来)}——明

「本文は、河内本であろう。別本にも近いところがある」と簡単に済みそうなところを、愚直にあげてみた。さらに付け加えるならば、「定家本に一定の距離をおき、いかにも鎌倉期らしい本文である」とでもいいえようか。

4行目の異同「くら人の少将」「蔵人の少将」「蔵人少将」は、本来「校異ナシ」で済まされるところであろうが、表記の差異ということであげたのである。ある時の学会で、少壮の研究者が口頭発表中に資料の「朝顔巻」をアサガオマキと訓んだのには驚いた。この人は「紫上」をムラサキウエと呼ぶのだろうか、「藤壺宮」もフジツボミヤなんだろうな、「藤

原道長」は当然フジワラミチナガであろう、と思つた次第。超立派な某国立大学を学部・大学院と過ごし、すでに某々大学の教育者が、である。この人は「井上」という苗字を何と訓むのだろうか。

図版でわかる通り、4・5・6の各行に誤脱があり、本行の書写者自身とおぼしき人物が修正を施している。しかも5行末「心」字の辺りも擦り消しが見える。これだけ修正箇所が集中するのも興味深い。

うにはにくからすきこへかはせとけちかく

てとは思ひもよらすさすかにいふかひな

くみえたてまつらてやみなんと思ひけ

りかのかたつかたはくら人の少将かよはと^す

き、給ふあやし^やいかに思らん少将心の

うちもいとをしくか^又の人のけしきも

(『源氏物語大成』一四二頁⑤～⑨)

〔8〕 冷泉為相 横本切(竹河)

個人蔵。

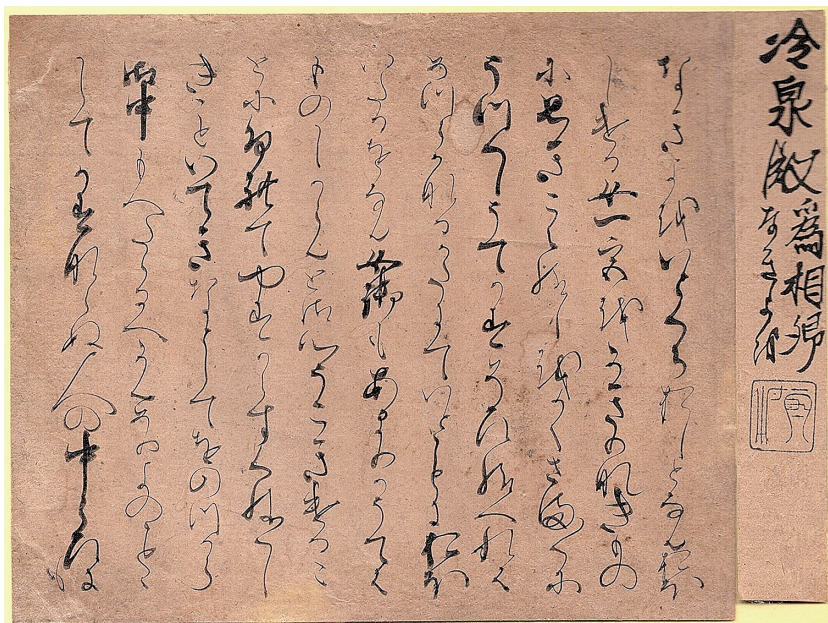
『古筆の世界』〔156〕のツレとみて間違いあるまい。『古筆の世界』では「為相を伝称筆者とする断簡としては珍しい横本の形態。現在のところツレを見出さない」と述べたが、ここに一枚ツレを加えることができた。古筆了任の極めを付す。「冷泉殿為相卿
なきよを」(「守村」黒印)とある。〔6〕も了任の極であつた。古筆家一門では突出した独特の筆跡で見間違えようがない。

縦一二・四センチ、横二四・八センチ。字高約一一・二センチ。

これも為相筆とされている。〔7〕〔9〕と見くらべてみても、いかに異なる筆跡であるかは一目瞭然であろう。鎌倉後期に比定しうる筆跡ということなのであるが、当該期にこのような横本の形態の写本の例があつたであろうか。改めて告白するまでもなく、稿者は管見である。識者のご教示を乞う。

内容は竹河の巻、玉鬘の長女・髭黒の大君は冷泉院の男待望の御子を出産したものの、母が次女の世話をやいて自らが省みられないと屈託している場面である。

4行目「うつくしう」は三条西家本のみ同じく、他の諸本は「うつくしく」とあるが、格別な校異のない箇所であり、定家本の本文と考えて問題あるまい。



なきよをいとくちおしとなんおほ
しける女一宮をかきりなきもの
に思きこえ給しをかくさま／＼に
うつくしうてかすそひ給へれば
めつらかなるかたにていとことにおほ
いたるをなん女御もあまりかうては
ものしからんと御心うこきけるこ
とにふれてやすからすくね／＼し
きこといできなとしてをのつから
御中もへたゝるへかんめりよのことゝ
してかすならぬ人の中らひにも

〔『源氏物語大成』二四九五頁⑨～⑭〕

〔9〕 冷泉為相 四半切（橋姫）

実践女子大学文芸資料研究所蔵古筆手鑑『源氏物語切集（Ⅱ）』所収。〔2〕の断簡のすぐ次に貼付されている。

極札状の紙片を付すが、印を欠く。「上冷泉中納言為相卿」とある。奥西宗円のごとく端正な筆跡だが、未詳。本紙は〔7〕〔8〕とも別筆。

縦二三・二センチ、横一四・八センチ。

内容は橋姫の巻、宇治のわび住まいに薫がさまざまな心遣いをする場面。八の宮が参籠する阿闍梨の坊にも振る舞いをする。本文は定家本。

左近のそうなる人御つかひにてかのおい人
たつねてふみもとらせよとのたまふとのゐ
人かさむけにてさまよひしなとあはれにおほ
しやりておほきなるひわりこやうのものあま
たせさせたまふ又の日かのみてらにもたて
まつりたまふやまこもりのそうともこのころ
のあらしにはいと心ほそくゝるしかるらんをさて
おはしますほとのおせ給へからんとおほしやりて

上冷泉中納言爲相卿

左近のうづうづ人ゆつゝいそぐのにい人
をいへくゑこもせよものいふとる井
人うゑいふにくゑまゐしとあれは
しやうそはうづうづいふやうのもゑ
をいへせよまゐ又の日はみてもいふ
ふりをまゐやまゐのうゑともいふ
乃あゝいふ心かよくゑゑんをさ
まゐるゑのあせぬへんとたはや

〔源氏物語大成〕一五三二頁⑬〜一五三三頁④

〔10〕 足利義輝 四半切(若紫)

個人蔵。

第一三代室町將軍・足利義輝(一五三六～一五六五)を伝称筆者とする古筆切は『古筆の世界』には〔210〕～〔214〕に若紫の巻、〔215〕～〔216〕に竹河の巻断簡を収める。若紫が縦二五センチ超であるのに対して、竹河は二三センチ超。別箇の写本として扱うべきだろう。戦乱の世に明け暮れ、最後は松永久通ら三好三人衆によつて弑せられる壮絶な人生のなかで文事とどのように関わり合ったか、これまた管見ながら、源氏切のみならず歌切なども義輝筆に擬せられている。『古筆の世界』以前、本誌『年報』第三八号所載『実践女子大学所蔵／物語関係古筆切目録稿―伊勢・源氏・狭衣』(別府節子・久下裕利と共稿)に、装飾料紙の一葉(但し、装飾は後入か)の『源氏物語大成』一五九頁3～10行目相当の本文を紹介している。

本断簡は、縦二五・五センチ、横一五・四センチ。字高約二一・五センチ。まさしく右の若紫断簡のツレである。

古筆了珉の極めに「光源院義輝公 御ふみあるを (「琴山」黒印)」とある。

内容は若紫の巻、若紫の君に未練を残して北山から帰京した源氏が、僧都や少納言に手紙を送り、尼君にも歌を贈つて自らの真情を伝えようとする場面である。

1 行目「(かう)御ふみあるを僧都も」は河内本「御つかひあるをかしこには僧都も」という対立本文のある箇所で、4 行目「おほかる人にてつきくしう」の部分も河内本に「ある人にておほかたの御有様なともきくしう」とあるところで、比較的大きな差異のある部分である。断簡は明らかに定家本。

御ふみあるを僧都もかしこまりきこえ給ふ

少納言にせうそこしてあひたりくはしくおほ

しの給ふさまおほかたの御ありさまなとかたること

はおほかる人にてつきくしういひつゝくれといとわり

なき御ほとをいかにおほすにかとゆゝしうなんた

れもくおほしける御ふみもとねんころにかい

たまひてれいの中にかの御はなちかきなん猶

みたまへまほしきとて

あさか山あさくも人をおもはぬになとやま

(『源氏物語大成』一七二頁^⑬～一七三頁^⑤)

〔11〕 足利義輝 四半切(竹河)

実践女子大学文芸資料研究所蔵古筆手鑑『源氏物語切集(Ⅱ)』所収。

縦二三・二センチ、横一五・八センチ。

神田道僖の極めがあり、「光源院殿義輝公ほへる梅の(「養心」朱印)」とある。〔10〕と伝称筆者を同じゅうし、筆跡も同類だが、切の大きさと字詰めの細かさゆえ、全体の印象がかなり異なる。

内容は竹河の巻、薫は玉鬘の邸を訪問し、女房たちに歓迎される一方、玉鬘から「まめ人」と自身が評されるのを面白くない思っている、という場面。

7行目「くつしたる」は「屈したる」という漢字を宛てうるところだが、諸本の情況は次のとおり。

くつしたる——断簡・明・公・幽

くしたる——三・(陽・麦・阿)

くんしたる——大・横・陽・池・肖・(御・七・尾・大・蓬・兼・岩)

く^んしたる——〔言〕

。む^くしたる——(鳳)

くむしたる——〔国〕

定家本系の底本大島本以下は「くんしたる」と撥音表記だが、三条西家本との関連本文である公条本・幽斎本(熊大本)と別本は「くしたる」と促音であることを示す。また、10行目に異文表記があるが、これも諸本を徴するに、

給^へたり——断簡

給へり——明・公・幽・〔陽・言・阿〕

給えり——〔国〕

たまへり——大・横・陽・池・肖・（河）

たり——三・〔麦〕

とある。断簡本文は定家本系であることは間違ひなからうが、明融本・三条西家本・公条本・幽齋本などのグループの本文と関連づけて考えるべきであろうか。

ほへる梅のはつ花さらは袖ふれて見給へなと

いひすさふにまことは色よりもとくちくひき

もうこかしつへくさまよふかむの君おくの

かたよりゐさりいて給てうたてのこたちやは

つかしけなるまめ人をさへよくこそおもなければ

としのひての給ふなりまめ人とこそつけら

れたりけいとくつしたるなりなと思ひる給

へりあるしの侍従てん上などもまたせねは所々も

ありかておはしあひたりせむかうのをしき物たつ

はかりしてくた物さかつきはかりさ^イいて給たり

四 おわりに

『源氏物語 古筆の世界』の編集が終盤になったころにも実践女子大学は『源氏物語』古筆切の収集を続けていたし、それ以後もコレクションは重層化しているようだ。本稿では、なんとか一一点の断簡の紹介するを得たが、この趨勢のなか、こうして自由な筆致とペースで紹介の稿を掲載して頂ける『年報』は、文字通り年一回刊であり、本稿のような調子では、ウサギとカメの競争よろしく、いつまで経っても追いつけないことになる。

そうこうしているうちに『古筆の世界Ⅱ』の企画が実現してしまうかもしれない。それはそれで喜ばしい限り。ただ、もはや稿者が出る幕ではないかもしれないが、そうした企画の機運を作るためにも、あるいは『源氏物語』断簡集成への関心の火を消さないためにも、本稿のような試みが必要なのかもしれない。ゆえに、本稿のとじ目は一応、「未完」とすべきなのだろう。

*

本稿の校異の示し方は通例のとおり、定家本系は略号のまま、河内本は(河)のごとくパーレンつき、別本は〔別〕のごとくキッコ括弧つきで示した。おおむね『源氏物語大成』『河内本源氏物語校異集成』『源氏物語別本集成』などに拠り、略号はそれらの書に準拠した。それ以外は、明Ⅱ明融本(実践女子大学蔵)、公Ⅱ公条本(実践女子大学蔵)、幽Ⅱ幽斎本(熊本大学本)とした。